

幼児の言語調査から見た

「話し合うこと」の指導上の問題

野 間 郁 夫

文部省の幼稚園言語指導書作成の途上において、日本の幼児の言語に関する資料が極めて少ないことから、われわれは、一方に幼児の実態調査を行ないながら、作成の仕事を進めなければならなかった。あるものは文部省の実験学校（川口市立舟戸幼稚園）について、研究、調査を進め、またその他の幼稚園の研究を資料とし、また一方で二回にわたって、全国的な調査を行なった。その一部は昭和三十四年度および三十五年度の日本保育学会においても発表したところであるが、「幼児の教育」五十八巻九号、五十九巻九号、日本保育学会第十二回、第十三回発表要項）、また「言語生活」三十五年五月号、八月号においても山田巖雄、村上政三氏が調査研究の一端を発表し、さらにこの八月行なわれた日本心理学会においても村石昭三氏が「幼児の話し合いの展開能力の評価」について発表している。（日本心理学会第二十四回発表論文集）

ここには第二回全国調査のうち、「話し合うこと」に関する調査

から考えられた問題のみを取りあげる。（前記三十五年度発表要項および「幼児の教育」五十九巻九号参照）

A、話し合いにおける興味ある話題

一、幼児間の話題

「幼児同志の間ではどんな話題が興味をもって話し合われますか。多いと思われる順に三つ書いて下さい。」という問について、年齢別に各園について答えていただいたものの結果から次のようなことが考えられる。

1、興味ある話題は年齢によって異なる。

五才児では「社会に関すること」（全話題の二四・三％）、「テレビ、ラジオで視聴したこと」（二一・七％）、「家庭に関すること」（九・七％）、「自然に関すること」（八・三％）、「遊びに関すること」（七・一％）の順で「自己に関すること」（六・七％）がこれ

に次いでいる。

この傾向が四才児では、テレビ、ラジオ（一八・二％）社会（一六％）家庭（一四・七％）自己（一三・二％）自然（一〇・七％）遊び（七・八％）の順になり、さらに三才児では自己（二七・二％）家庭（一四％）テレビ、ラジオ（一三・三％）自然（八・四％）および遊び（八・四％）と順序が大きく変り、五才児で一位の「社会」が七位になっている。

また年令別に多い順からその話題の五〇％以内のものを拾うと、五才児では社会とテレビ、ラジオで四六％、四才児ではテレビ、ラジオ、社会、家庭で四八・九％、三才児では自己、家庭、で四一・二％（テレビ、ラジオを加えると五四・五％）となる。

幼児の関心が自己や家庭から次第に外に向って社会やテレビ、ラジオへの関心が高まってくることを示している。

2、社会に関する話題は年齢の進むにつれて多くなる。

三才児では四・二％で七位にあったものが四才児では一六％で二位、五才児では著しくふえて二四・三％で一位となる。ことに三才児と四才児との間に著しい違いが見られる。

その内容は、「水害」「人工衛星」とか、「こだま号」のこととかいった社会ニュース的なことが多く、次いでスポーツである。

幼児の社会認識が年令の進むにつれて拡大し、身辺の家庭生活から近隣社会へ、さらにより広い社会へと拡がると一般的には考えられるが、それは社会交渉圏の拡大であって、社会視聴圏（？）とでもいふべき社会圏の拡大も考えられるべきであろう。これは今日のマス・コミュニケーションの発達から当然考えられる問題であり、

次の「テレビ、ラジオで視聴したこと」に関する話題の調査結果からもうなずけることである。今日の幼児にとっては従来子どもからはかに遠いと思われる一般社会のでき事が、テレビ、ラジオを通じて、じかに子どもに迫って来ているのである。ことにテレビの普及とこれによる視聴的な事物の理解になれるに従って、この傾向は一層促進されるであろう。

しかもこれら幼児の広い社会に対する認識は、多くは視聴的な経験で、直接経験の裏づけがないし、またこれを正當に理解するだけの発達もまだ不十分である。幼児の社会性の指導が従来のごっこ遊びなどの指導による小集団生活への参加による社会的態度、能力の指導だけではなく、時代とともに広がっていく社会生活への理解をいかに指導するかという点に今後の教師の問題が残されているといえよう。

3、テレビ、ラジオで視聴したことについての話題は幼児全体としてもっとも高い率を示している。

すなわち、五才児が二位、四才児が一位、三才児が三位である。テレビとラジオではテレビの視聴による話題が圧倒的に多い。幼稚園およびその園児の家庭のテレビ設備の急速な充実状況と相まって、この傾向は幼児が花園の中でなく、はっきりと近代生活の中にいることを物語るといつてよい。

前述の幼児の社会への接近もこのマス・コミのメディアによるものと思われる。

4、テレビ、ラジオ番組の視聴状況

今回の調査ではこれに関する資料が不十分なことから決定的なこ

とは言えないが、一般的な傾向は次の結果からうかがえよう。

すなわち、テレビにおいては漫画劇場などの漫画ものに対する興味が各年令とも、もっとも高い率を示す。三才児一七・九%、四才児一二・一%、五才児七・三%となり、年令の進むにつれて漸減の傾向をあらわしている。同時に興味ある番組が年令とともに多くに分れて来て、興味の分化の傾向を示す。三才児では漫画が一七・九%であるに対し、とんま天狗、少年ジェット、スーパーマン、七色仮面、人形劇、月光仮面、テレビのおばちゃまなどが四%から五%程度であるのに対して、五才児では漫画が七・三%と減り、右に挙げた他の番組の外にジャガーの目、まぼろし探偵、鉄人二十八号、などが加わってそれぞれ五%から六%を示すようになる。

幼児全体としてみると、漫画(一〇・六%)に次ぐものは人形劇(五・九%)、少年ジェット(五・七%)、月光仮面(五・六%)とんま天狗(五・四%)、スーパーマン(五・一%)等であるが、ここで注意したいのは、漫画、人形劇、テレビのおばちゃま、テレビ幼稚園などのような、幼児にとって比較的望ましいと思われる番組に対する興味が、三才児三一%、四才児二四%、五才児一六%と年令の進むにつれて減少し、逆に月光仮面、少年ジェット、鉄人二十八号、スーパーマン、七色仮面、まぼろし探偵、白馬童子というような冒険、探偵ものが次第に増加していることである。

ここでわれわれは幼児に対する放送視聴の指導の重要性を強く訴えたい。

このように幼児がテレビ、ラジオに強い興味を示し、これの視聴を通して多くのものを得ている以上、すでに幼児からマス・コミの

メディアに対する正しい認識のしかたの指導が行なわれるべきことは言をまたないところであろう。

幼稚園では積極的にテレビ、ラジオの視聴を指導計画の中に取り入れ、これを如何に指導するかの指導目標、指導内容を検討し、指導の技術を教師たちが十分に身につけることが必要である。同時に教師もテレビ・ラジオの番組に注意し、これを視聴して、こどもの話の仲間入りしながらこれを指導し、番組の選択を正しく行ない得るような指導が望ましいと言うべきであろう。

これを言語指導の面だけから考えても、テレビ、ラジオは正しい共通語を聞く機会を与えるものであり、正しいことばと正しくないことばすなわち乱暴なことば、下品なことばとを区別して、正しい語感、語意識に導くために教師を助けるところが大きいものであるから、言語指導の資料として欠くことはできないものと言うべきである。

5、家庭のこと、自己に関すること

家庭に関することは、家庭のできごと、家族のこと、来客のことなどが話題になる。

三才児では一四%で二位、四才児では一四・七%で三位であるが五才児では減って九・三%で三位である。

三才児、四才児において高い率を示すことからして、この時期の幼児の話し合いの指導における話題、あるいは経験発表の内容として適當であるといえるであろう。

自己に関することとは、たべものこと(お弁当を含む)、どこかへ行ったこと、何か買ってもらったこと、自分の衣類、靴などの

身の回りのもの、自分の持物のことなどを含んでいる。

三才児では一位で二七・二％、四才児では四位と下がり一三・二％、五才児ではさらに下って六位で六・七％を示している。

この結果からだけみると、幼児の話し合いを導く話題として、四才児についてはまだしもとして、とくに五才児にはあまり適当とは言えない。経験発表の内容に多くとりあげられるが、これを他の幼児に興味をもってきかせ、活潑な話し合いを導くことは相当困難であり、助言の工夫などの教師の指導技術を多く必要とするであろう。

しかしまた、前述の如く、三才児においては自己および家庭に関する話題の合計が全体の四一・二％になることには注意されなければならない。四才児ではこれが二七・九％、五才児では一六％である。

二、幼児と教師の間話し合い

幼児が教師に自発的に話す話題の調査結果からは次のようなことが考えられる。

1、社会に関する話題は五才児が一四・三％で二位、四才児では五・五％で七位、三才児が〇・八％で八位と著しく低くなる。

2、テレビ、ラジオで視聴したことは、五才児で一三％で四位、四才児で九・七％で三位、三才児では六・三％で四位である。

3、家庭に関する事、自己に関する事を幼児はもつとも多く教師に話す。

自己に関する事は五才児でも二〇・五％で一位、四才児で三三・三％、三才児で三九・三％といずれも一位であり、幼児は教師に

もつとも多く自分を語るといえよう。

家庭に関する事もいわば自己の延長であって、五才児で一四％（三位）、四才児で一四・九％（二位）、三才児で一九・七％（二位）と何れも高率を示している。さらに自己および家庭に関する話題の合計は、五才児が三四・五％、四才児が四八・二％、三才児が五九％となる。

要するに、幼児は教師に自分を多く語りたのであり、自分のことを知ってもらいたくて教師に話しかけるのであり、聞いてもらうことが教師の喜びなのである。このような教師に話したい、教師と話したいという強い要求に対して、教師はよき聞き手となって、幼児の話したい要求と、教師と親しみたい欲求とを満足させて、その情緒の安定をはかり、望ましい性格の形成に導くとともに、言語指導の面から幼児から多くの話を引き出し、話す能力を高めるように指導しなければならない。

B、話し合いの場面

幼児の自由な話し合いが活潑に行なわれる場面の調査の結果から次のようなことが分る。

すなわち、もつとも多い場面は自由な遊びの場面、これは各年齢とも四四％から四六％と同じような率を示している。そのうちでも四才児について言えば自由遊びで一七・三％、自由な描画のとき七・七％、砂場遊びが五・六％、次いで積木遊び、ままごと遊び等である。昼食時にも各年齢とも二七％程度で、これに次いで登下園の際（一六％から一七％）となるが、なかでも登園した時が多い。

友だちや教師というよい話し相手を得て前日の各自の体験を話したい要求が強いことを示している。

言語指導のむずかしさはこのような幼児の要求を適時にとらえ、随時、随所において、各幼児の言語能力の発達や、話す内容を考え、指導していかねばならぬところにある。

C、話し合うことの指導

話し合いをどのようにしたら活潑にすることができるかは、言語指導上教師のもっとも関心の大きいところであろう。「幼児の教育」九月号に話し合いが活潑に進まなかった原因として教師があげるところをあけておいたが、話し合いの人員の過多、環境、年齢差、天候の影響等の外的条件に帰しているのが約四三%で、これにこどもの状態を加えると六三%の高い率を示している。教師は話し合いを活潑にするために外的条件の整備を相当重く考えていることがうかがわれる。

しかし、話し合いを効果的に展開する方法として、別の調査項目であげられたものは次のごとくである。

a、指導の展開段階における工夫（四七・一%）

教師の適切な発問、助言、視聴覚教材の利用、音楽、リズム表現、劇化を織り込む、幼児の発言をできるだけとりあげる、適当に反応し、賞讃を与える、話を補足し、話題を皆にはつきりさせる、絵本を利用する、小グループで話し合いをさせる、聞いている幼児に疑問、感想などを質問させるなどがその内容である。

b、話題の選択を工夫する（二一・八%）

幼児の興味ある話題を選ぶことをあげているが、それは身近な経験、共通の経験、直接的な豊かな経験などである。

c、環境条件の整備（一八・五%）

場席、話し合う体形、教師の位置等の環境の工夫や、幼児に安定感を与え、抵抗のない、おちついた話し易い雰囲気を作ることを挙げているが、話し合いをすすめるための資料、補助材料の整備を次にあげている。

d、導入の方法（七・三%）

教師の経験したことを話したり、歌やリズム運動、幼児の経験したことから導入することなどをあげている。

e、教師の事前の準備（五・三%）

幼児の現在の興味や、興味をもつ話題を知り、あるいはこどもとともに同一の興味ある経験をしておいてから話し合うことが多くべられている。

む す び

幼児教育の分野においては未だ基礎的研究の部分における資料が極めて不十分といわなければならない。この分野の少ない研究者の今後の研究にまたなければならぬ。ともに広く現場教師各位の協力が得られなければ十分な資料を整えることは困難であろう。このような悩みを調査に当って痛感させられたが、日本の幼児教育の発展のために今後の各位の御協力がどうしても必要であることを最後に強調しておきたい。

（埼玉大学助教授、文部省幼稚園言語指導書編集委員長）